

クローズアップ NGO・NPO

認定NPO法人

日本・雲南^{れんぎ}聯誼協会 理事長 初鹿野^{はじかの} 惠蘭
雲南少数民族の子どもたちに学ぶ喜びを

中国・雲南省の山岳地帯には25の少数民族が独自の文化を守りながら暮らしていますが、その多くが経済発展から取り残されたまま極めて貧しい生活を強いられています。私たち日本・雲南聯誼協会は、雲南の少数民族の子どもたちに学ぶ喜びと未来への希望を贈り届けるとともに、日雲の人々の架け橋となって相互理解を深めることで、互いに関心を持ち敬意を抱く関係を実現することを目指して活動しています。

きっかけは大地震— 少数民族の子どもたちの現実に 大きな衝撃

1996年、雲南省麗江市でマグニチュード7.0の大地震が発生しました。雲南出身の私は、日本で集めた募金を届けるため被災地を訪れ、そこで経済的に恵まれない少数民族の子どもたちが、劣悪な環境でなお懸命に学ぼうとする姿を目の当たりにし、強い衝撃を覚えました。崩れかけた校舎の中、子供たちは蝋燭^{ろうそく}をともして勉強していました。先生たちはお金のない親たちに代わって自身の給料を子どもたちの雑費に充てていました。視察に行った小学校で零下2度の寒さに眠ることができず、一晩中校庭を走っていたこともあります。そんな中を、子どもたちは布団すら満足にない状況で過ごしていたのです。

その後の調査の結果、山岳地域の子どもたちの多くが学校に通えないこと、特に学校や教師の不足が大変深刻な問題であることがわかり、支援活動を始めました。2000年6月24日に任意団体

を設立、翌2001年にはNPO法人格を取得しました。

小学校建設から草の根の交流まで、 少数民族地域でのさまざまな活動を 展開

活動の大きな柱は「50の小学校プロジェクト」です。25の少数民族のために小学校を2校ずつ建設することを目標に掲げ、2012年には23校目が完成しました。同事業では、建設費用を現地政府と必ず折半し、住民に労働力を提供してもらうなど、地元根付いた学校作りを心がけています。費用を全額支援しない理由は、支援される側に自立に向けた自助努力を促すとともに、協会に寄せられた寄付金をより多くの子どもに届けるためです。協会が建てた小学校で、これまでに



この笑顔が私たちの活動の原動力です
(支援第21校目老村小学校イ族の子どもたち)

1万人を超える子どもたちが安心して勉強できるようになりました。

現地の実情に合わせ、支援の内容も広がっています。2008年には、少数民族の女子高校生を支援する「25の小さな夢基金」を始めました。経済事情に加え、少数民族には男尊女卑の考え方が根強く、女の子が高等教育を受けるのは非常に困難です。「夢基金」では、日本のサポーター1人が女子高校生1人の学費を援助します。心のこもっ

た手紙のやりとりなども行っており、2012年、サポーターは延べ230人になりました。

小学校建設後のフォローアップにも力を入れ

ています。校舎を建設して終わり、ではなく、さらに一歩踏み込んで、衛生的習慣の普及や子どもたちの豊かな心を育む活動にも積極的に取り組んでいます。

2009年にJICA草の根技術協力事業に採択された「100万回の手洗いプロジェクト」では、支援小学校の先生へ手洗いの重要性と、それを子どもに教えるための体験型授業方法を提案し、学校から子どもたち、そして子どもたちから保護者を含む地域の人々へと衛生意識の向上を図りました。同時に手洗い場やシャワー室、バイオガストイレなどを建設。ハードとソフト両面の支援は高い相乗効果を生みました。2012年には日中の劇団と協力して支援校での児童劇公演を実施し、小学校5校の800人を超える子どもたちに、生まれて初めての観劇をプレゼントしました。他にも、支援校児童と日本の小学生との壁新聞を通じた交流など、さまざまな活動を展開しています。

■ 12年間の活動が育んだ日本と雲南の絆

これらの活動を支えているのは、たくさんの会員、協力者、そしてボランティアの皆さんです。現地で行われる支援校の開校式や夢基金生の卒業式に数え切れないほどの方が日本から参加し、子どもたちと直にふれあいました。こうした交流は国や人種の垣根を軽々と乗り越え、確かな絆を生み出しています。2011年3月に起きた東日本大震災では、発生直後から雲南市民の募金や支援校の子どもたちからの絵手紙等が次々と協会に届けられました。日本の皆さんへの愛と敬意にあふれるメッセージに、着実に育った「絆」を実感し、



2012年6月には「25の小さな夢基金」第4期生42人の少数民族の女の子が高校を卒業し、卒業式に駆けつけた「日本の両親」と喜びを分かち合いました

深い感動を覚えました。

人対人の草の根の交流は、やがて日中関係を変えていくことでしょう。未来を担う若者たちと私たちがお互いに1人の人間として向かい合うことで、新しい感覚を持つ日中の架け橋が生まれるに違いない—そんな思いから、2012年には雲南で日本語を学ぶ大学生を支援する「アジア未来への人材プロジェクト」も立ち上げました。以前からボランティアとして協会の現地活動を支えてくれていた学生たちは、同じ目的を共有する私たちの仲間でもあります。

■ 未来を担う子どもたち、そして若者たちを応援したい

協会設立3年目の春、雲南でも最も奥地にある支援小学校を訪れたときのことで。山道で、野良仕事の手伝いをしている幼い兄妹に出会いました。「勉強は好き？学校へ行きたい？」と問いかけると、しばらくきょとんとしたものの、満面の笑顔で「大好き。学校に行きたい！」と答えてくれたのです。支援の意義を確信した瞬間でした。この笑顔を絶やさないう、1人でも多くの子どもが夢や希望を持てるよう、できる限りのサポートをしたい。そんな思いが私の原点であり、原動力でもあります。

雲南の少数民族を取り巻く環境も、少しずつではありますが改善されつつあります。政府の目がようやく山奥の方へ向けられ、少数民族の貧困問題も議論のテーブルに上がるようになりました。協会は現地政府と協働しながら、より現地のニーズにあった支援を続けると同時に、支援小学校での草の根の交流活動や「アジア未来への人材プロジェクト」など、若者たちの自由で豊かな心を育む活動に一層力を入れていきたいと思っています。



「日本加油！（がんばって！）」東日本大震災の際には、支援校の子どもたちがたくさんのメッセージを送ってくれました（写真は支援第19校目老木壩小学校リス族の子どもたち）